

# 中国上山下郷運動における知識青年の 「再教育」に関する研究

趙 天歌

## 1. 研究目的・背景・意義

本研究では、1968年から1980年にかけて、中国の上山下郷運動において行われた知識青年の「再教育」に焦点をあて、「再教育」理念の形成とそのねらいについて検討し、知識青年が上山下郷運動中に受けた「再教育」の内容を明らかにする。

1960年代の中国では、大躍進という農業や工業等の方面で飛躍的な（非現実的な）発展を遂げようとした一連の極左的な政策が行われた後、さらに国内における修正主義の蔓延による資本主義の復活を防止するため、1966年から1976年までと長く続いた無産階級文化大革命（以下、文革）が展開された。その中で、「農村に行って広大な天地で大いに力を発揮する余地がある」、「知識青年は農村へ行き、貧農下層中農<sup>1</sup>から再教育を受けることが重要だ」という毛の最高指示（呼びかけ）に従い、1968年の冬、国民とくに都市部青年の思想改造（社会主義革命事業の後継者育成とそれに求められる世界観・価値観の転換）を目的とした上山下郷運動（以下、上山下郷）が全国的に開始した。概算統計によると、1980年まで約1,700万人の都市部青年が農村（辺境地を含む）に行かされ、長期にわたって生産労働をさせられていた<sup>2</sup>。それらの都市部青年の中で多くが中学校卒業者（うち一部は当時在学中）であったが、文革によって高考（大学統一入学試験）制度が廃止される直前に進学できた大学生や一部の青年幹部もいたという<sup>3</sup>。彼/女らのことは知識青年（以下、知青）と称されていた。知青は下郷（農村へ行く）時にまだ平均18歳であり、学校教育を受けて学び続けるべき年齢であったにもかかわらず、政策に従って家族と別れて下郷し、長い間学業から分離されていた<sup>4</sup>。上山下郷の政策には「農村・辺境地支援」の標語が掲げられており、そして、政策の呼びかけに賛同し積極的に関わった知青が多かったことから見て、知青たちは貢献者として自らの青春を国家建設のために捧げたことはたしかである。しかし、そうはいっても、彼/女らは文革と上山下郷に巻き込まれた特殊な世代であったことも否認のできない事実である。後に知青のことを「失落的一代（ロスト・ジェネレーション）」と呼ぶようになったのも、そうした彼/女らの青年期における喪失感・欠落感が背景にあったからと窺える。

一方で、上山下郷の政策において注目したい点がある。それは、毛の指示として知青に対し示された上山下郷の動員スローガンである「貧農下層中農から再教育を受けることが重要だ」の中で、「再教育」という文言がとくに強調されていたことである。つまり、上山下郷の展開を通して、知青の思想改造を図るためには、下郷先で農民による「再教育」を知青に受けさせることが重要な手段である。このように、知青の「再教育」は政策の中核的課題として、上山下郷が終結するまで長年にわたって実行されていた。実際、上山下郷の経験は、知青に物理的・精神的に大きな影響を与えており、そして、下郷中にだけでなく、彼/彼女の高齢期に至るまでの人生にも持続的に影響を及ぼしている<sup>5</sup>。そうした運動終結後も長く持続している物理的・精神的影響へのさらなる検証と裏付けをするためにも、当時、上山下郷の中核的課題である知青の「再教育」について調べる必要がある。

以上のことを背景に、筆者が抱いている疑問は3つある。①なぜそれまで都市部で学校教育を受けてきた知青は農村で「貧農下層中農」による「再教育」を受ける必要があったのか、②「再教育」とは具体的にどのような内容であったのか、③上山下郷において知青の「再教育」の実施はどのような結果を出したのかといった内容である。

これらの問題に対して追求することは、毛の「再教育」理念を理解し、知青が上山下郷中に農村での処遇を知るために意義があり、歴史の真実に近づくためにも深い意味がある。また、こうすることによって、前述した上山下郷が知青に与えた物理的・精神的影響への検証を重ね、知青たちに対する社会の理解をさらに深めることができる。

## 2. 本研究の位置付けと研究方法

### 2.1 先行研究の検討

1980年代以降、中国では知青を題材とした文芸作品が現れており、歴史学や社会学の領域において上山下郷の顛末およびその後世にもたらした社会的影響に関わる著書と論文も増えるようになった。だが、中国最大の学術論文検索データベース「CNKI 中国知網」（以下、CNKI）で高度検索をしたところ、知青の「再教育」についての研究は未だ十分に進められていないとわかった。

CNKIの「哲学・人文科学」と「社会科学第I輯・第II輯」の専門分野において、論文・資料タイトル（キーワードを含む）の中に「知識青年」と「再教育」が包括されているものは、計38件がある。その中で、文革と上山下郷といった政治運動の形成動因と展開への言及に重点を置いているものと、知青生活を描くことで歴史的真相を指摘しようとする主に知青自ら書いた小説等の作品いわゆる「知青文学」、および「知青文学」を整理・検討（書評を含む）するものは、検索結果の2/3以上を占めている。これらの知青の「再教育」と直接的な関連がないものを除いた後、その数字は10件にまで激減した。10件という数字から見ては先行研究が多いように見えるが、実際には、それらの資料の中で、知青の「再教育」に関する先行研究としては不十分なものが多い。例えば、上山下郷当初において知青が受けた「再教育」を記した回想録と述懐や、地方の公社生産隊に

よる「再教育」実施の状況の評価や報告書など、単に記録と整理にとどまっている。知青の「再教育」政策が短時間で全国的に広がった原理を考察した劉<sup>6</sup>（2008）はあるが、コミュニケーション学の視点から「再教育」の伝播プロセスについて論じているものである。張<sup>7</sup>（2004）は毛による再教育理論の形成の原因について検討し、「再教育」の考え方は文革と上山下郷より前に存在し、毛自身の青年期の教育と生い立ちと深く関係していると指摘した。しかし、張は上山下郷期における「再教育」の展開状況や知青にもたらした結果については十分に言及していない。

まとめをすると、知青の「再教育」に関わる先行研究は、上山下郷中に出された政策文書・新聞や地方行政（公社生産隊等）による報告書などの整理が中心である。また、すでに発表されている文革や上山下郷の関連研究から、知青の「再教育」に関わる文言を抽出して再整理したのが多いという特徴がみられる。それに対して、知青の述懐（口述）や日記などの質的資料への検討を踏まえたうえで考察したものがほぼ皆無である。すなわち、これまでの先行研究において使われていた資料には偏りがあり、質的資料への検討を含めた総合的な考察が不十分であると窺える。

## 2.2 研究の方法

本研究は、文献資料調査およびその分析の方法を中心とする。知青の「再教育」に関わる文献・学術論文や政策文書のみならず、地方誌記録や知青の述懐、日記などの質的資料をも広く当たっていく。また、当事者であった現在高齢期にきている知青の語りを踏まえ、「再教育」の意味を理解したうえで、上山下郷中における知青が受けた「再教育」について考察をする。

なお、本研究に使用する各種の質的資料、特に知青の日記や語りの中に当事者の個人情報等が含まれており、プライバシー保護のために、本稿における記載名はすべて仮名とする。また、語りの原文と考察の結果を研究発表に使用する許可を当事者から得ている。本稿において各種資料を引用する場合、筆者による補足を [ ]、意味の解釈を（ ）、省略を……で示す。

## 3. 「再教育」理念の形成とねらい

### 3.1 知青の「再教育」理念の形成

知青の「再教育」理念は、上山下郷が開始してから初めて提出されたものではない。毛は、若い時に私塾に通い、そこで伝統的な儒教思想を教えられた。しかし、彼は知識をただ単に丸暗記するような教育方法と古い封建的価値観を固持する学習内容に対して大きな不満を抱いた。青年期の毛は、学校に入って科学知識と新思想を学ぶことで視野を広げ、国家復興のために中国青年としてできることは何かについて自分の考えをさらに発展させていった。彼は、戦乱や政権交替などによる騒動が続いた社会に苦しむ人々を覚醒させるために教育の普及の必要性を認識していた。一方、国民の教化教育のために知識の教授を中心とする近代学校教育に対して抵抗もあった。このような学びや思想の自由を抑制された若い時の就学の経験を背景に、のちに、毛は中国（中華人民共和国成立後1949-66年の17年間）の学校教育を批判するようになった。

しかし、いくら若い時に私塾や近代学校の教育に対して抵抗と批判があったといっても、毛は、中国における伝統的思想・文化・歴史・哲学などから大きな影響を受け、実際に儒教の教えの中から「知（知識）」と「行（実践）」の統合を主張していた。中でも特に「行」、つまり、社会的実践の部分をもっと重視していた。若者の社会的実践を重視していたことを示す根拠として、彼は農村を「労働大学」にたとえ、1946年の時点ですでに自分の息子を農村に送り出して、そこで学ばせたという事実がある。

やがて毛は高齢期に入り、これまでに抱いていた「学びよりは実践」の考え方がますます強くなり、彼は新中国成立後の学校教育制度や教育内容が社会の現実との不釣り合いな状態、若者たちの勉強以外に生産労働に関しては何も知らないことに対してさらに不満が高まった。1966年、毛は「五七指示」の中で共産主義の理想として最も完璧で純潔な社会主義社会を建設することを強調した<sup>8</sup>。彼はその理想の実現を図るために若者世代つまり知青の「再教育」が必要であると考え、そして、知青たちにとっての最適な「再教育」の場は農村だと指摘した。つまり、苛酷な生活の実態と生産労働をよく知っている「貧農下層中農」による「再教育」を通じて、知青の思想（世界観・価値観）を改造することで、完璧な社会主義国家を創る＜新青年（社会主義革命事業の後継者）＞の育成を期待していた。

そして、ほぼ同時期に文革が始まり、全国各地の学生は学校教育をやめ、毛主席の兵士（紅衛兵）に変身して革命と階級闘争に参加した。だが、学生たちの運動が収まらなくなる暴走状態になり、社会の安定に危害を及ぼす存在となった。これを背景に、毛の知青の「再教育」理念はとうとう形成の最終段階に至ったのである。

知青の「再教育」が、理念の形成から政策の施行まで急速に進展した理由は、政治的・経済的な面においては、紅衛兵の学生運動の暴走を収めること、国内における資産主義・修正主義の復活を徹底的に防ぐこと、無産階級革命事業の後継者を育成すること、都市部の就職難の状況を解決するなどが挙げられる。また、「再教育」の実施は、革命運動に関わった多くの都市部青年（知青）をどう安置するののかという問題の対策でもあったと考えられる。このように、文革開始から二年後の1968年に、上山下郷と知青の「再教育」が国家レベルで全面的に展開された<sup>9</sup>。

### 3.2 知青の「再教育」理念のねらい

「再教育」の理念が形成されるにつれ、そのねらいの内容に変容もみられた。知青の上山下郷は全国規模の運動が展開される前、すでに1950年代の時から始まっていた。前節で述べたように、1946年に、毛は自分の息子を農村に送り出して労働活動を通じて学ばせたことがあった。また、彼は1956年に『中国農村の社会主義高潮』の中で、「農村は広大な天地である。そこでは大いに力を発揮できる」という考え方を発表した<sup>10</sup>。ただし、当時の知青の上山下郷は、本当の意味での農村支援と辺境地建設のためのものであり、一部の青年幹部と有志の者たちによる呼びかけに応える自発的な行動であった。

しかし、1960年代以降、中国では大躍進運動が失敗し、都市部の就職困難の問題が深刻になったと同時に、知青の上山下郷が急速にレベルアップし、全国的な運動となった。1964年、中央政府は『関与動員和組織城市知識青年参加農村社会主義建設的決定（草案）』を打ち出し、「知識青年下郷指導小組」を成立した。この頃はまだ文革が本格的に開始する前だったため、知青の「再教育」理念・政策の目的はまだ大きな変化がみられておらず、農村支援と辺境地建設とともに農村についての社会主義建設と社会革命事業の後継者の育成のためであった<sup>11</sup>。

一方で、1966年に文革開始後とくに文革初期に学生運動がエスカレートし、革命の名目下で暴走してしまった紅衛兵は、社会の安定に危害をもたらす存在となった。その状況を見た毛は、知青に対する「再教育」の必要性を再び強調し、一刻も早く「再教育」政策の実施推進を図った<sup>12</sup>。このように、知青の「再教育」は上山下郷の中核的課題となった。

ところで、上山下郷と「再教育」政策の展開は紅衛兵の暴走が導火線であるという説もある。この説は正しいともいえるが、「再教育」理念の形成に至るまでの経緯を踏まえて筆者が各種文献資料を整理・検討した結果、学生運動の暴走が導火線だという説は、歴史の真実のすべてではないとわかった。つまり、知青の「再教育」理念が1950年代の時点ですでに存在しており、文革初期の学生運動（紅衛兵の暴走）が上山下郷の開始を促した要素の1つではあった。しかし、全国規模の知青の上山下郷の展開を推進した中軸として支えたのは毛の「再教育」理念であった。また、上山下郷への参加を動員する内容（スローガン等）には1950年代の時の内容をそのまま用いられたが、しかし、實質上は農村において「再教育」を受けさせることで知青の思想改造（世界観・価値観の転換）を目的としていたということである。

## 4. 上山下郷中の知青「再教育」

### 4.1 「再教育」に対する理解の違い

上山下郷・「再教育」の政策が出された当初、たしかに党の最高指示に対して積極的に応えた知青は多くいた。しかし、政策推進のための動員は強制的であったという実情がある。また、動員に來た人民公社<sup>13</sup>の幹部たちは農村の生活状況を大げさに美化し、不実な状況を伝えて政策促進の任務を進めたこともある。全国各地の農村においては、政策の内容がまだ正確に伝達・理解されておらず、知青の安置場所すら整備されていなかった状態で、大量の知青を急遽受け入れるように要求された。そのため、上山下郷の前期段階においては、「再教育」といっても、内容や形式がどのようなものなのかも分からぬまま、知青が下郷し、現地の農民にとっても知青を受け入れて「再教育」するための準備の余裕がなかったと窺える。

そして、政策についての説明が不十分だけでなく、知青が「再教育」を受けるために農村にくることだけが強調されていた。知青は下郷当初において現地の農民たちとの関係が対等でなく、農民たちから軽蔑されるケースも少なくなかった<sup>14</sup>。すなわち、多くの知青は「広大な天地で力を発揮する」という夢に感動し期待を持って下郷した一方で、農民たちは知青のことを都市部から追い出

されて過ちをおかした者たちで「再教育」の必要があると誤認識していたという実情がある。このようなねじれた実態が作り出された最大の原因は、政策推進上の問題で、両側（知青↔農民<農村・辺境地の人々>）における「再教育」理念と上山下郷政策への解説・理解の違いを引き起こせたことにある。

これらの状況を背景に、上山下郷の前期段階において「根を下ろして革命（再教育）をやる」という政策方針の下で返城（都市部への帰還）できる見込みがなく、知青の多くは困惑と孤独に包まれていた。その一方、農民たちは、生産労働について何も知らない知青を蔑視し彼/女らの下郷に無理解である場合もあった。知青の中には下郷先での不公正な処遇に対して反抗（抗議）した者も多々みられた。また、彼/女らの状況が政府の上層部に知られ、対応措置などがとられるようになったのは、中央政府が1970年5月に通達した「関与進一步做好知識青年工作的報告1970第26号」がきっかけであった。下記は「1970第26号」文件の一部抜粋である<sup>15</sup>。

各級党組織と革命委員会は下郷知識青年に対する取組みに重点を置くこと。報刊、放送は、下郷知識青年の先進的事績に対する報道を一層強化すること。……現地で資材を調達し、下郷知識青年の住宅難問題を解決すること。上山下郷を破壊する悪質分子と悪事に打撃を与えること。……各地における下郷知識青年工作を点検し経験を総括し、中央に報告すること。

「26号文件」発表後、知青の下郷先に置かれている物理的にも精神的にも厳しかった状況を調査できるようになった。また、上記内容の通り、調査や報告を積極的に行っていく姿勢から、政府はその後に知青が抱えている問題の解決や生活状況の改善に取り組み始めたことも容易に想像される。

一方、「再教育」への理解の違いという「誤解」が解け、知青の状況改善つまり彼/女らの「再教育」が目に見え始めるほど変化していったことに対して大きな影響を与えたのは、教育調整（1972年）の展開だと考えられる。1970年代以降、中国では革命闘争の緩和と極左的な考えへの反省がみられた。また、各地の知青が不公平な処遇に対して反抗し状況改善を求めた成果があり、中央政府も「26号文件」に続き、「再教育」理念についての理解において知青と農民の間で「誤解」が生じていることに気づいて改善措置を行うようになった。1972年頃、周恩来が中心となって全国の教育調整が行われた<sup>16</sup>。まだ文革と上山下郷の途中であったが、当時の中国社会において教育復活（知青の「再教育」ではなく、学校教育一般の復活を通じて全体の教育の質的向上を図るため）の傾向がみられるようになった。さらに、教育調整の実施につれて知青の返城の可能性も拡大するようになったことから、1972年の教育調整は文革と上山下郷の熱を冷却させた政策措置として歴史的な意味があったといえる。

したがって、次節では、歴史の転換点ともいえる教育調整が展開された1972年を境にし、上山下郷を運動前期と運動後期に区分して、知青が置かれていた状況の変化を見ていく。そうすることで、彼/女らの受けた「再教育」の具体的な内容をより正確に捉え伝えることを試みる。

## 4.2 「再教育」の実際

ここで、前節で述べた内容を踏まえながら、上山下郷中における本来あるべき（理想像）の知青の「再教育」と実際に展開された「再教育」との相違点について整理する。図1は、知青の「再教育」が運動前期から後期へと移り変わる様子をまとめて可視化したものである。

図1のように、本来の「再教育」政策の目的は、資産階級知識分子（知青）の思想（世界観）改造と無産階級の再教育を行うことであり、上山下郷中において行われた実際の「再教育」と同様だったとわかる。「再教育」の内容と形式は、本来ならば、貧農・下層中農から「闘私批修（私利と戦い修正主義を批判すること）」「刻苦奮闘（一生懸命努力して強い精神力を鍛えること）」「憶苦思甜（昔の苦しみを思い出して今の幸せをかみしめること）」を学び、知識を生産労働と結びつけることでマルクス主義と毛沢東思想についての理解を深めることであった。

しかし、実際、当時は貧農下層中農の多くが非識字者であり、たとえ地方行政（公社）の幹部であっても平均教育レベルが低かったため、知識量や教養等の不足といった問題状況下にあった。その中でも、とくに運動前期において展開された「再教育」は殆ど農作業や植樹造林など生産労働に限られており、ここでいう知青の「再教育」は「生産闘争に参加する中で己を磨く」とことと意味付けられていた。つまり、農民中心による知青「再教育」の展開は、理論上も実践上も限界があった。なぜなら、当初の農村教育レベルからいうと、社会主義と毛沢東思想についての理解の困難さと言うまでもなく、基礎的な読み書き能力ですら身につけていない者が大勢いたからである。

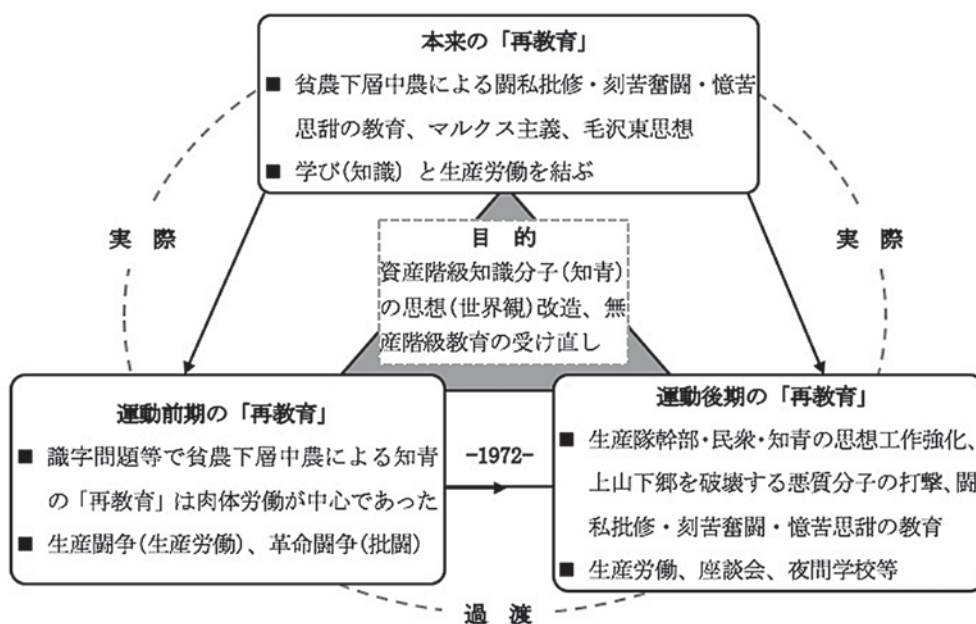


図1 上山下郷中における本来の「再教育」と実際の「再教育」

〔何<sup>17</sup>2006, 趙<sup>18</sup>2012, 傅<sup>19</sup>2016, 知青日記<sup>20</sup>2012, 知青の語り<sup>21</sup>を基に作成〕

上述内容の裏付けとなるのは、次のように、運動前期に下郷した知青の陽の語りである<sup>22</sup>。

知青が下郷して再教育を受けるというが、僕の見たところでは本当はそうとは限らない。……一緒に馬を放牧する農民と夜に稲むらの上で星を見ていて、……僕は彼に「これは北斗星、あれは啓明星（夕星）だ」と指し示していた。……ある日〔夜〕、天候が急に変わり、僕は「帰ろう！ もうすぐ雨が降るんだ」と言い、……あの時は21歳だったけど、それでも僕は「（こういう）風は雨の前だ」と知っている。でも貧農下層中農の彼は僕のいうことを信じなかった。僕は自分の馬に乗ってすぐにでも戻ろうとした時、雷が鳴り始め、その後すぐに土砂降りの雨が降ってきた。……貧農・下層中農は僕のいうことを信じなくて、まるで〔こんな〕僕（再教育を受けるべき側）がよくも彼を教育したと、……だから「再教育」といっても本当はどっちがどっちに教えるかってね。

陽の語りから、上山下郷と「再教育」政策が掲げた「貧農下層中農から再教育を受ける」ことに對して彼は仕方がないという気持ちを強く持っていたとわかる。すなわち、知識を持っている知青が下郷して農民から何を教わるべきかについて、陽は非常に困惑していたことが窺われる。この状況から、陽のように同様の疑問を抱いた知青も少なくないだろう。また、農民側は不満とまでは行かないが、少なくとも「教育を受けるべき側」にある知青の陽を高い立場から見ていたとわかる。

一方で、前述したように、周恩来が中心となって行われた教育調整（1972年）を転機に上山下郷の風向きが次第に変わるようになり、中国では革命闘争の緩和と極左的な考えへの反省がみられた。また、各地の知青が不公平な処遇に対して反抗し状況改善を求めていた成果があり、中央政府も「再教育」理念については知青と農民の間で理解に大きな差があったことに気づき、改善措置を行った。運動の前後期における「再教育」を行う農民側の考え方の変容について、何は回顧録の中で次のように述べた<sup>23</sup>。

（運動の前期段階）畑で作業している時に、ある貧農家庭の子どもに指差されて、「あんたらは過ちを犯した。だからここに再教育を受けに下放されているのだ。〔知青なんかじゃない〕、『子弟』だ」と言われた。（運動の後期段階）農民の中に〔あの時〕知青たちを自分の家に連れて帰って面倒を見なかったことに後悔の念を抱いていた人もいる。

この回顧から、農民側の「再教育」への理解と知青への態度は運動前期と後期において明らかな変化があったとわかる。それは、長い年月をかけて、農民側と知青側に信頼関係が築かれたことによる。また、運動後期において政府による上山下郷と「再教育」政策の重心転換とそれに伴う改善措置が展開されたことによる。

無論、全国のどこでも同じように当初から「再教育」という文言だけで知青たちは悲惨な目に



あったわけではない。知青は下郷先農村の学校で民弁教師に任用されたり、医療衛生の環境改善のため「赤脚医生（裸足の医者）」として村人に信頼されたりすることなどもあり、本当の意味で農村・辺境建設と教育普及のための人材として大切にされたケースも珍しくない<sup>24</sup>。

また、運動前期は文革の階級闘争が最も激しく展開された時期であり、下郷先における知青の「再教育」は生産労働のほか、革命闘争（批闘等）との関与も不可避だったと考えられる。同時に、知青の日記から生産労働や革命が中心であった運動前期においても実際、昼間の生産労働の後、話し合いの形をとって座談会を開いたりし、実践（労働）を通じて社会主義思想への理解について、知青の間で意見交流するなどの「再教育」も確かにあった。だが、これらの「再教育」活動は形式的なものが多く、運動後期になって漸く質的な改善が見られたのである。

以下では、上山下郷、特に運動後期に関する資料が僅少である中、運動後期における知青の「再教育」についての人民教育<sup>25</sup>（1973）による短評と地方公社生産隊である赤峰県王家店公社四家大隊党支部<sup>26</sup>（1974）が発表した報告書を例に取り上げる。

知青の余暇学習を組織するために、無産階級を司る政治を先行させ、政治を学ぶ・文化を学ぶ・科学技術を学ぶという三方面を結合することを堅持しなければならない。学習内容は、農村の三大革命のために奉仕し、理論と実践の統一という原則を貫くこと。学習形式は現実を見据え、実情に応じて適切な措置を講じ、多種多様でありながら実効性を追求するべきだ。余暇学校、夜間学校、学習班、短訓班、ラジオや通信教育などの挙行も大いに進める。（人民教育、1973年）

[知青の] 世界観の転換は根元からの転換だ。……政治夜学を作り、知識青年に政治（社会主義と毛沢東思想）、軍事、農業技術と文化科学知識を勉強させ、文体活動（レクリエーションと体育）を展開させた。……党支部は積極的に知青と語り合いをするなど思想問題の解決を支援した。……青年の再教育を進めると同時に公社大隊の幹部と大衆への教育に注意すること。（赤峰県王家店公社四家大隊党支部、1974年）

上記の資料から、運動後期において「再教育」の内容や形式は生産労働中心であった運動前期に比べ、より知青の余暇学習の促進に重点が置かれるようになったとわかる。また、下線部にあるように、運動後期では再教育の内容は日常の生産労働以外に、夜学、学習班や通信教育といった「再教育」が展開され、思想教育に限定されず学習の内容と形式も多様であった。そのうえ、赤峰県（内モンゴルに位置する）の公社幹部や知青の中の積極分子が中心となって、座談会や意見交流会などを組織的・計画的に開催したり、話し合いの形でマルクス主義や毛沢東思想について学習感想を交換したりし、日頃から「批評と自我批評（他者評価と自己評価）」も行っていった。

以上、運動前期における知青の「再教育」は生産労働や革命闘争に重点が置かれたため、本来の

教育目的から逸脱する状況が多々見られた。だが、運動後期になると、そのような形式上に留まる政策促進のための「再教育」の性質が変わり、生産労働等の実践的な社会教育活動に加え、知青の政治学習を深めるとともに彼/女らの余暇学習も重視されたという実情がある。これらの状況から、運動中において本来の知青の「再教育」政策で期待された目的、つまり「知と行の統合」による社会主義革命事業後継者の育成を図る知青の再教育は、ある意味、一定程度の結果を出したといえよう。

### 4.3 知青の「再教育」への捉え方

上山下郷中における知青「再教育」の全貌をより詳しく把握するために、当事者の知青が「再教育」をどのように捉えていたかを知る必要がある。よって、官放や地方行政の資料だけでなく、知青が自ら記録した質的資料と調査で得られた語りへの検討も必要である。以下、運動当初における知青の心情が記された日記をいくつか例に取り上げる<sup>27</sup>。

#### ① 哈爾濱籍・女性知青・当初17歳

「(山村に着いた時) 多くの貧農下層中農が私たちが歓迎しに来てくれた。……私の新しい家はここだ。戦おう!」(1968年9月28日)

「数日来、戦友(知青)たちは飲まず食わずで、隠れて泣いていたり、一人でぼうっとしたりして、来た頃の豪情壮志(雄大な気持ちと壮大な志)は全く無くなった……[それを見て]私もそれに影響された。」(1968年10月24日)

#### ② 蘇州籍・男性知青・当初15歳

「(土を掘り出す時) 手の霜焼けがわれて血も出た……苦境は自分を鍛えてくれる。僕は『一不怕苦, 二不怕死(苦も死も恐れず)』の精神を心に銘記すべきだ……毛主席の良い戦士になるのだ。」(1969年3月27日)

#### ③ 上海籍・女性知青・当初18歳

「(醸造場で火災が起きた)[消火] 現場で誰かが大声で毛主席語録を朗読するのが聞こえて『下定決心, 不怕犠牲, 排除万難, 去争取勝利(決心して犠牲を恐れず, 万難を排し勝利を勝ち取ろう)』cこれは試練だc 私は氷と雪を運ぶために走り回って国の財産を救うのに貢献した。」(1971年3月14日)

#### ④ 遼寧籍・男性知青・当初17歳

「今日は青年点(下郷先)での生活の最後の日、……下郷の辛酸甘苦の経験は僕にとって最も捨てがたい[もの]だ……数年間の鍛錬で僕の肌は黒くなり、体も痩せた。でも僕は農民たちに近づき、彼らと強い絆を築くことができた。」(1972年1月5日)

上記の内容から、運動当初において若い知青たちは多くが上山下郷と「再教育」政策の呼びかけ

に応え、生産労働を促し国家財産を守るために、苦と死を恐れず自分の身を犠牲にするほど強い決心があったとわかる(①②③)。だが、下郷先の農村では過重な労働が日々続き、厳しい生活環境に直面して失望した者もある(①)。これらの状況から、革命闘争と思想改造のための再教育に情熱を抱きながらも、不案内な土地で日々続く重労働等に茫然とするという非常に矛盾した心情に堪えていた少/青年(知青)は決して少数ではなかったことがわかる。また、下郷中は「辛酸甘苦の経験」が多かったが、農民と深い感情を構築できたなど「最も捨てがたい」貴重な経験でもあると「再教育」をポジティブに捉えていた場合も存在する(④)。

ここで特に注目して述べたいのは、下郷に対して不安や困惑があったにもかかわらず、なぜ多くの知青は「再教育」政策に賛同し運動に積極的に関わり、揺るぎなく毛沢東思想を強く信じていたかということである。この疑問に答えてくれたのは、知青の雲の語りである<sup>28</sup>。

あの時(運動当初)の人は皆毛主席を信仰していた。……毛主席は[戦時]二万五千里の長征も乗り越えてきたから、私たちのこのぐらゐの苦は全く比べ物にならない。私は困難にあった時にいつもそれ(長征精神)を思い起こして[自分を励ました]。……毛主席は「農民の足には牛の糞が付いているが、彼らの心はきれいだ」と言った。……実際、農民は多くの優秀な品性を持っている。……農民からも多くの生活の知恵を教わった。

毛主席は本当に偉大な指導者、……あなたたち(今の若者)にこの心情を理解できないのも無理はない。平和の時代に生まれ育ったから……私たちの[生まれた]頃は新中国が成立したばかりの時だった。私たちが[小さい時から]受けてきた教育は「憶苦思甜(昔の苦しみを思い起こして今の幸せをかみしめる)」や「発揚革命伝統(中華民族の革命的伝統を発揚する)」で、映画もほとんど抗日戦争や解放戦争の話だった。……平和で幸福な生活を手に入れるのはどれだけ容易でないことかを知っている[から]、……彼(毛)への崇敬と追隨の念は心底に深く根付いている。……私は下郷中にいろんな苦勞をしてきた。しかし、私は今(高齢期)でも当初の経験は[自分]の財産だと思う。

実際、雲は黒五類<sup>29</sup>(富農階級)出身であった関係で、運動当初において不公平な処遇に遭うことが多々あった。雲は18年も農村に滞在し、計り知れないほど様々な困難(物理的・精神的苦痛)に堪えてきた。そうした彼女は恐らく上山下郷運動と「再教育」政策を批判的に捉えるだろうと予想されたが、上記の語りから、ネガティブな要素がほとんど読み取れず、むしろ毛沢東思想を心の支えとして苦境を乗り越えようとした堅忍不拔の精神と生活に対する前向きな態度が見られた。

そして、雲が語ったように、戦争や社会の激動から漸く国の新生を迎えた頃に生まれた知青世代は、「憶苦思甜(昔の苦しみを思い起こして今の幸せをかみしめる)」や「発揚革命伝統(中華民族の革命的伝統を発揚する)」など強烈な愛国教育を受けていた。大衆を不安定な社会情勢から救い

出し、国家の指導者である毛への感激と追隨、また彼の思想を信仰として敬虔に遵從する状況は中国全体で見られた。このような社会環境の中で生れ育った知青は多くが毛の指導に基づいた「貧農下層中農から再教育を受けることが重要だ」という「再教育」政策に賛同し、「農村に行って広大な天地で大いに力を発揮する余地がある」などの使命を強く自覚し、自ら積極的に上山下郷に関わった状況も理解に難くないであろう。

## 5. 考察—まとめにかえて—

本研究では、各種文献資料への考察を通じて、①毛の主張した「再教育」理念の形成、②そのねらいの上山下郷中における変容、③上山下郷に関わった知青が受けた実際の「再教育」、を明らかにした。また、知青の日記や語りから、彼/女らの「再教育」への捉え方を検討し、政策推進側だけでなく、政策の結果側にある当事者の理解も考慮に入れ、異なる角度から知青の「再教育」を見ることができた。

上山下郷政策の中核的課題である「再教育」理念の形成は1950年代であり、上山下郷よりもさらに遡る。毛の思想に基づいた「再教育」理念は、本来、知識の習得（学校教育）にとどまらず、生産労働（社会实践）に関わることによって「知と行の統合」を目指すことであった。しかし、文革と上山下郷の展開に伴い、「再教育」の考え方は、知青の思想改造、つまり社会主義革命事業の後継者育成とそれに求められる世界観・価値観の転換に重点が移行するようになった。

上山下郷期になって、知青の「再教育」が中国全土において実行された。だが、知青を受け取る農民側が「再教育」理念と政策に対する理解の誤りによって、上山下郷の前期段階では、知青が農村で不公平な処遇に遭うことは多々あった。また、当時の農民たちのリテラシーが低く、本来の「再教育」理念に求められる内容の実施ができず、運動前期における「再教育」の内容は実際、日々続く重い生産労働（肉体労働）が中心であった。一方、1972年に展開された教育調整をきっかけに、それまで行われていた一連の極左的な政策を見直し、教育を復活させる傾向があった。文革と上山下郷の熱を冷却させる政策措置としての教育調整が進められたことによって、運動の後期段階では、下郷先農村に滞在している知青たちの置かれた状況や「再教育」の内容と形式は、前期に比べて質的な改善が見られた。

知青の「再教育」は運動後期において内容と形式が多様になった。だが、全体的に見ると、政策の推進・指導側にある下郷先の公社幹部と農民たちの能力が欠如しており、知青への「再教育」の内容とその指導には専門性と系統性が乏しかった。また、知青日記と高齢期知青の語りの中でも生産労働に関する内容が多かったことから、「再教育」理念の目指した「知と行の統合」という内容は実際、上山下郷中において「行」つまり生産労働のほうを過度に偏っていたとわかる。そして、当初の時勢で知青の「再教育」には政治イデオロギー的な内容が多く含まれていた。この点から、下郷した後の知青たちは学びの自由（自己決定）が抑制されていたと推察される。

しかし、歴史は常に両面性がある。実際、艱苦な環境の中で社会的実践（生産労働）を持続して

きたことで、多くの知青は、厳しい環境に耐える粘り強さや自らの努力で楽しみと希望を求め続ける強い精神力を鍛えられた。彼/女らはそうした不屈の精神と前向きな態度をさらに返城後も一貫して心の支えにしていた<sup>30</sup>。また、知青たちは、下郷中に工農兵と信頼関係を構築し、長期にわたって苦楽を共にした知青同士の情を築くことができた。それによって、知青の「再教育」が目指した社会主義思想と集団主義観念の定着（世界観・価値観の転換）も一定程度の結果を出したことが窺われる。

教育を知識と社会的実践と結びつけること（「知と行の統合」）は今でも中国の重要な教育方針である。上山下郷中に実行された知青の「再教育」という過去の経験から反省して学ぶことは、現在、そして未来の教育問題の改善・解決につながる。中国では、今後、教育における「知と行の統合」を目指すためには、人々の自己決定を尊重し、思想政治教育の推進に際して理論と現実を結びつける必要がある。さらに、社会的実践を推進していく上で、公平性が担保される合理的系統的な内容・指導・管理体制の構築と整備に取り組むことが重要な課題である。

本稿では、文献研究の方法を中心として知青の「再教育」理念と内容を考察することで、知青の農村での状況が上山下郷の後半になって改善されたことがわかった。知青の中で上山下郷の前半に関わった者と、その後の者とで下郷中の境遇や上山下郷への捉え方などが異なっていたと予想される。そこで、知青を前期と後期に分け、それぞれのカテゴリーに対してさらに事例調査を行い、両者間の相違について比較検討し総合的考察を行うことは、今後の新たな研究課題としたい。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費JP21K20221の助成を受けたものです。

## 【注】

- 1 貧農下層中農とは貧農と下中農の合わせた言い方である。
- 2 潘鳴嘯（著）・歐陽因（訳）『失落的一代—中国の上山下郷運動・一九六八至一九八〇』香港中文大学出版社、2009年。
- 3 常京鳳「生命歷程：“文革”对“老三届”学業和家庭的影響」『中国青年研究』中国青少年研究中心・中国青少年研究会、1996年1期、34頁。
- 4 潘（2009）前掲書。
- 5 趙天歌「中国上山下郷運動による知識青年への影響に関する考察—高齢期知青のライフストーリー分析を中心に」『日本学習社会学会年報』日本学習社会学会、2019年9月、85～98頁。
- 6 劉贊強「“再教育”政治伝播の特徴与借鑑」『当代青年研究』上海社会科学院社会学研究所、2008年11期、6～10頁。
- 7 張淑貞「毛沢東関与知青再教育理論的形成原因探析」『探求』中共広州市委党校・広州氏行政学院、2004年2期、59～63頁。
- 8 謝昌余「毛沢東心中的理想社会—從《学生之工作》到《五七指示》」『安徽行政学院学報』安徽行政学院、2011年2期、78～81頁。
- 9 張（2004）前掲資料。
- 10 中共中央文献編『中国農村の社会主義高潮』北京：人民出版社、1956年。

- 11 王東維・高曉斌「知識青年“接受貧農下層中農再教育”運動的歷史啓示」『当代青年研究』上海社会科学院青少年研究所, 2013年4期, 13~19頁。
- 12 張(2004)前掲, 62頁。
- 13 人民公社(1958-82年)とは, 工・農・商・学・兵が結合した末端の行政機関である。
- 14 何申「接受『再教育』的日子」『文史精華』河北省政協文史資料委員会, 2006年5期, 33~38頁。
- 15 顧洪章(主編)「関与進一步做好知識青年工作的報告1970第26号」『中国知識青年上山下郷大事記』人民日報出版社, 2009年, 92頁。
- 16 高学軍「周恩来与1972年的教育調整」『党史博采』中共河北省委党史研究室, 2001年6期, 10~13頁。
- 17 何(2006)前掲資料。
- 18 趙文遠「論知識青年“再教育”運動」『鄭州航空工業管理学院学报』鄭州航空工業管理学院, 2012年4期, 12~15頁。
- 19 傅錫恕(口述)・傅錫志(整理)「文革中我送知青下郷接受再教育」『世紀』上海市文史研究館・中央文史研究館, 2016年2期, 93~95頁。
- 20 李素梅(主編)『知青日記』黑竜江美術出版社, 2012年。
- 21 知青への聞き取り調査(ライフストーリー・インタビュー)の実施期間: 2017年9月~2019年11月。
- 22 陽(調査実施日2017年9月17日)男性知青。
- 23 何(2006)前掲資料。
- 24 趙(2019)前掲資料。
- 25 人民教育「認真抓好上山下郷知識青年的業余学習」中国教育報刊社, 1973年11期, 41頁。
- 26 赤峰県王家店公社四家大隊党支部「把知識青年工作作為革命大事来抓」『新農業』瀋陽農業大学, 1974年14期, 1~3頁。
- 27 李(2012)前掲書, 2頁, 21頁, 77頁, 104頁。
- 28 雲(調査実施日2017年9月11日)女性知青。
- 29 文革期に, 階級は有利な状況にあった紅五類(革命軍人・革命幹部・労働者・貧農・下層中農)と不利な状況にあった黒五類(地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子)に区分された。
- 30 趙(2019)前掲資料。